



「褒める」と「自己肯定感」

ご入園、ご進級おめでとうございます。本年度もどうぞよろしく願い申し上げます。

豪在住の際、職場の同僚や上司とのお付き合いは家族ぐるみでした。プライベートも一緒にシェアする事で、チームワークも深まり、生産性も上がっていたように思います。そんな中、幼児期のお子様や小学生のお子様をお持ちのご家族との夕食会やBBQ, パーティ等で、子育てで全く日本と異なる事を感じたことがあります。

「褒める」です。

日本ですと、自分の家の子をお客様の前で褒める事は恥ずかしい事という文化がまだある？と思いますが、お客様がいようがいまいが、良かったら「褒める」そして「ハグをして頬にキス」を皆の前で親御さんがしておりました。

だから大人になってからの「自己肯定感」、自分に対する自信に満ち溢れているんだなとつくづく感じたものでした。日本には、「自己肯定感」が満ちているとは言い難いと思いますし、それを逆に「自信過剰」と捉える文化もあるのかもしれない。

幼児教育の観点からだと、子どものころからたっぷり褒めてあげる事で「自己肯定感」を満たしてあげることが大切だという事は明白です。

私の大好きなピアニストの辻井伸行さん。奇跡の盲目のピアニストとして世界的に有名な米国のコンクールで優勝を果たしました。偶然にもコンクールの時、出張で米国に滞在中で、たまたまつけたテレビで初めてそのコンクールでの演奏をライブで拝見した私は、音色が素晴らしく感激し、日本人としてこんな大舞台でと大泣きした記憶があります。

彼も母親からたくさん褒められて育ちました。目の見えない彼にも何か長所があることを信じ、ある日たまたま見つけた音感の才能を伸ばすためにピアノの先生のところへ通わせたのです。実は、同じ時期にバイオリンも習っていました。ただ、こちらの先生は伸行さんを叱ってばかりのトレーニングでした。辞めてしまったそうです。

もし、ピアノとバイオリンが逆だったら、もしかしたら、バイオリニストとして世界的に有名な人物になっていたのかもしれない。

中途半端に褒めて甘やかすのではなく、たとえ躰は厳しくとも、その子しか持っていない得意なことや大好きな事を（本人もしくは誰かが見つけ）それを十分に伸ばせる環境を大人が整えてあげる事は大切なのだと思います。

今年度から、クッキングとダンスが加わり8プログラムがアフタープログラムで繰り広げられます。また、デイリープログラムでは新渡戸キッチンが加わり、5プログラムが繰り広げられます。

子が、何か一つでも得意な事や好きな事を見つけ、親（保護者様）と親心を持った大人（先生方）がたくさん「褒める」一年でありたいと願っております。

